

帝国の言語で帝国を越える  
—日本語を通じた朝鮮作家と中国作家の相互疎通—

金在湧（円光大）

1、境界を越える日本語

日本帝国下で被植民地地域の作家が互いに疎通しようとする努力は多かったが、実際には言語の障害によって容易ではなかった。朝鮮の作家が同じ植民地、あるいは半植民地の苦痛を味わった台湾や中国の作家と、文学について理解しようとしたものの、言語や情報不足などによって容易に接近することは困難であった。李陸史が上海の魯迅や新京の古丁の作品を紹介・翻訳したことは、非常にまれなことの1つであった。李陸史が東アジアの未来という次元で中国の役割をきわめて重要に見ていたために可能だったわけではない。そのような視野を持つ人々は、当時、朝鮮にきわめて多かったが、ほとんどは発想だけに終わってしまった。李陸史にそのようなことができたのは、中国の北京大学をはじめ、さまざまな地域の機関で、長いこと中国語を学んでいたためである。

中国の作家が朝鮮の文学を翻訳して紹介することはより一層困難であった。中国の知識人は自らの国と東アジア未来の次元で朝鮮が重要であるということを見ることができなかったために、あえて理解しようとしなかったのだろう。朝鮮を、日本帝国の植民地になった、きわめて無力なみすぼらしい国と見なしたためである。そのうえ中国では、朝鮮語を理解する作家や翻訳者がほとんどいなかったため、より一層困難であった。中国が日本帝国の威嚇に直面し、強い反帝国意識が芽生えると、ようやく同じ境遇にある朝鮮を理解しようという意欲が出てきた。だが、朝鮮の文学語を翻訳するほどの能力を備えた人たちは出てこなかった。意欲はあったが、能力は依然としてなかったのである。

そのような点で日本帝国下の上海や新京で出た2つの朝鮮文学の翻訳書である『山霊』と『朝鮮短篇小説選』は、きわめて重要な意味を持つ。興味深いのは、この2つはすべて日本語を通じた重訳であるという点である。1936年の『山霊』も1941年の『朝鮮短篇小説選』も、ともに中国の作家や翻訳者が、日本語で書かれたり、あるいは日本語に翻訳された作品を見てこれを中国語に翻訳した。李陸史に見られるように、朝鮮の作家が中国語から朝鮮語に直接翻訳したときわめて対照的である<sup>1</sup>。日本語を通じてではあるが朝鮮の作品を翻訳・紹介しようとするほど、中国の作家や読者は朝鮮の文学状況に対して深い関心を持ったのである。普通の関心ならば、これほどのことはやらなかったであろう。まさ

<sup>1</sup> 安寿吉の「厨房女」(1935)が中国語に直接翻訳されたことはかなり例外的である。朝鮮人が朝鮮語の作品を中国語に翻訳したものを、そのまま掲載したものと思われる。中国・東北地域だったので可能なことであった（中国語訳の書誌などは不明一訳者）。

に植民地の連帯意識でなくしては、このことを説明することは困難である。中国が日本帝国の威嚇や侵略にさらされ、知識人や作家は、すでに植民地になった朝鮮の事情について、きわめて大きな関心を持つようになった。そうでなかったとすれば、中国の知識人は朝鮮の文学に対してさほど深い関心を持たず、したがってこのような翻訳書は出なかつたらう。そのような点で、この 2 つの本が翻訳された東アジア的情况を考察することは、日本帝国下の植民地文学者の連帯において重要な意味を持つだろう。

## 2、上海の『山霊』—プロレタリア国際主義と民族問題の乖離

胡風が 1936 年に『山霊——朝鮮臺灣短篇集』（上海文化生活出版社）を出版する時に参考にした日本語の翻訳作品は、主として朝鮮や台湾のプロレタリア文学の作品である。日本の左派雑誌や出版社で日本語に翻訳された朝鮮や台湾の作品を中国語に翻訳したものである。

日本の左派作家が朝鮮や台湾の作品を翻訳する時、基本的にプロレタリア国際主義に立っていた。当時、日本の左派作家は、植民地のような問題に対しては特に気を遣うことはなかつた。植民地問題は全世界的であり、プロレタリアが勝利して資本主義を克服すれば自然に解決されうると信じた。帝国主義というものは資本主義の極端な発展であるから、資本主義が克服されれば帝国主義は自ずから解決されうると信じたのである。レーニンの帝国主義論の延長線上で出た考えである。むしろ民族のようなものを考慮する人間はブルジョアジーの計略に利用されるものと考えた。民族のような言葉はタブーであった。ブルジョア民族主義とプロレタリア国際主義の対立枠組の中で世界を理解したのである。この作品集に紹介された李北鳴、**チョン・ウソン（漢字名不明—訳者）**の作品を日本語から翻訳したのは、まさにこのような理由のためであった。張赫宙の場合は翻訳ではなかつた。日本の左派文学者から見て、張赫宙こそは朝鮮と日本のプロレタリア国際主義連帯の象徴であった。張赫宙は、資本主義によって疲弊していく朝鮮の農村をきわめてよく描いた。資本主義が支配し、平地の農民として生きていくことができず火田民となるが、それもうまくいかなくなると、すぐ家族が死んだり売られたりしていくという短篇小説「山霊」（1933）は、そのような傾向の代表作である。また、彼ははじめから日本語で創作をしていたので、これを翻訳する必要性もない。そのような点で当時の日本の左派は張赫宙に熱狂し、彼を見習う作家が朝鮮や台湾で出るほどであった。張赫宙は特に台湾では学ぶべきモデルだったのである。当時、朝鮮では、朝鮮語で創作することが当然だったが、台湾ではすでに日本語で創作をすることが 1 つの大きな流れを形成していたので、日本で日本語で創作しながらプロレタリア国際主義を宣揚する張赫宙こそ最も学ぶべき作家であった。

実際にこの単行本に掲載された作品の中で、台湾の作家・楊逵の作品「新聞配達夫」（1932、原文日本語）は、このようなプロレタリア国際主義を最もよく示すものといえる。台湾から東京にきて、新聞配達夫として苦学するが、金を儲けるどころか、むしろ借金が増える

だけである。結局、最後に悟るのは、日本人か台湾人かが重要なのではなく、資産階級か無産階級か核心だというものである。日本に来て会った人々の中でも、無産階級は自分を理解してくれるが有産階級はそうではない。台湾でも資産階級は自分を理解してくれないが無産階級はよく理解してくれる。だから国籍や民族が重要なのではなく、無産階級かどうかということが重要なのだ。日本人なら無条件に嫌っていた主人公が、結局、そのような考えを捨て、日本のプロレタリアとの連帯を感じることで終わるこの作品は、当時、日本の左派知識人が最も好んだ作品である。この作品集に掲載された他の作品も、「新聞配達夫」ほどに強くプロレタリア国際主義を掲げることはないが、このような立場に立っているだろうといえる。

だが、胡風が日本語で創作・翻訳された朝鮮の作品や台湾の作品を中国語に翻訳・出版する時は、状況がまったく異なっていた。よく知られているように、胡風は左連（中国左翼作家連盟）に参加するほど徹底してプロレタリア文学の作家であった。だが、このころにいたると状況が多少変わる。胡風は無産階級の革命文学を主張していたが、1934年頃にいたると以前とは異なった態度を示す。すなわち日本帝国が満州国建設にとどまらず、中国・華北地域に侵略するのを見て、資本主義と帝国主義を同一物とみなすことができないという認識に達する。帝国主義は資本主義を前提にするが、だからといって帝国主義は資本主義と完全に重なるわけではないことを知るのである。したがって、以前のようにプロレタリア国際主義の立場をそのまま堅持できなかったのである。日本の帝国主義に対して新たに認識し始めたのである。まさにこのような態度の微妙な変化のために、日本の植民地であった朝鮮と台湾の作家を紹介しようと考えたのである。

胡風のこのような態度は、本書の序文によく示されている。胡風は最近になって中国の民族は生死存亡の岐路に立っているが、朝鮮や台湾の話は他人の話でなく、自らの話として読むことができると言っている。民族という言葉は、当時、朝鮮でもそうであったが、中国でもブルジョア的な用語として扱われていた語彙である。民族という言葉はまさに民族主義につながり、このことはすなわちブルジョア的だということである。当時、民族主義、あるいはブルジョア的とは、中国内では当然、国民党を示すものであった。だが、このような用語をこのように簡単に使っているということは、この時期にいたって胡風の認識がある程度変化し、そのような認識の変化が朝鮮や台湾の作品を翻訳しようとした歴史的背景であるということがわかる。

実際にこの時期、中国の左派文壇では「国防文学論争」が繰り広げられていた。周揚に代表される国防文学論者と、魯迅や胡風に代表される「民族革命戦争の大衆文学」論者に分かれて論争をしていた。胡風は、国防文学のスローガンではなく民族革命戦争の大衆文学というスローガンを掲げてはいたが、それ自体がすでに以前の無産階級革命の文学スローガンとはずいぶん異なるものであった。もちろん、胡風と魯迅は、民族革命戦争の大衆文学というスローガンが、過去の無産階級革命の文学というスローガンの連続であるとはいえないものの、その内容の変化は否定することが困難であった。今日、このような変化がどこ

から来たものかについては、依然として中国をはじめ西欧の学界でも論争的だが、筆者が見るところ、胡風の掲げる「民族革命戦争の大衆文学」スローガンは、単にコミンテルンの方向転換、すなわち1935年8月にあった7次大会での決定——反ファシズム人民戦線——を単に追従するものではないことは明らかである。この作品集に掲載された作品は、この決定以前にすでに中国の左派雑誌に翻訳・掲載しようとしたものであることを考慮する時、コミンテルンの影響でこのように変化したわけではないという点を確認することができる。

このようなことをより一層示す例がもう1つある。胡風がこの朝鮮や台湾の作品を翻訳しようと思った時、基本的には自らの判断から出発したものではあるが、魯迅の影響もとても強かった。魯迅はかつて、ソ連の作品をはじめとして、さまざまな国の無産階級文学を紹介する仕事をした。だが、植民地の作品を翻訳することは特別なかった。だが、日本が中国の華北地域に干渉するのを見て、考えが少しずつ変わり始めた。満州事変が起きる時も泰然とし、上海事変が起きた時にも動揺しなかった魯迅が、日本が華北地域を占領しようとする兆しを見てから、考えを変え始めたのである。そしてこのころに、日本の知識人との出会いを通じて、日本の進歩的で良心的な知識人にこれ以上期待することはできないと判断するほどであったから、当時の魯迅の心情は察するに値する。野口米次郎との対談で、魯迅が「どうせ搾取されるのならば、外国人より自国人にやられる方がいい、これは感情の問題だ」と言ったという有名な話は<sup>2</sup>、この時期、微妙に変わっていた魯迅の帝国主義に対する認識をよく示す言葉である。このようなことは、この時期に魯迅が書いたものにもよく示されている。

民族革命戦争の大衆文学は、無産階級の革命的文学が一步発展したものであり、無産階級の革命的文学の今の時期における真実かつより広範な内容である。このような文学は、現在すでに存在しており、その基礎のうえであらためて実際の戦闘生活を通じて育成されることによって、美しい花を開花させることになるだろう。だから新たなスローガンが出てきたことは、革命的文学運動の中止と見なされたり、「行き止まり」に達したなどと認められたりしてはならないのである。したがってこの新たなスローガンは決して、従来のファッション主義に反対し、すべての反動に反対した血の闘争を中止しようとするものではなく、この闘争をより一層深化・拡大し、より一層実際的に、より一層細かく屈曲的に進めようというものであり、闘争を抗日的におこない、民族反逆者に反対する闘争へと具体化して、すべての闘争を抗日的なものとして、民族反逆者に反対する闘争という、この総体的な流れに結集させようというものである。また、それは決して革命的文学が、自らの階級的な指導責任を放棄しようとするものではなく、階級的党派を問わず、全民族的に一致団結し、外来侵略者に反対して闘争

---

<sup>2</sup> 堀まどか『二重国籍詩人野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012）。

するべく、その責任をさらに重くし、さらに拡大しようというものである。この民族的立場がまさに真の階級的な立場である<sup>3</sup>。

魯迅や胡風が国防文学論争の過程で「民族革命戦争の大衆文学」というスローガンを掲げたことは、周揚などの攻撃に対して単に防御的な次元だけで出たものではなく、長年の苦悩の中から出たものだということがわかる。

このような点を考慮する時、本書は微妙な緊張の産物だということがわかる。胡風は民族問題に対して新たに認識し始め、このような企画をしたにもかかわらず、実際にこの作品に掲載された作品は、過去のプロレタリア国際主義の傾向の作品なのである。当時、胡風が選択できる朝鮮や台湾の作品は、日本語で創作されたり翻訳されたものしかなく、またこれらの作品は基本的にプロレタリア国際主義に立つものだったために、自らの変化した立場と符合する作品を選ぶことは基本的に不可能だったのである。したがって過去のプロレタリア国際主義の立場に立つ作品の中で、朝鮮や台湾の民衆の苦痛をよく描いている作品を選んだものと見られる。このような乖離は、胡風をはじめとする中国の文学者が、朝鮮語を直接読むことができず、日本語を通じて作品を選ばざるを得ない限界から来るものである。朝鮮や台湾の作品を幅広く読むことができなかつた当時の状況を考慮する時、仕方がないことでもある。このような不利な条件の中でも、朝鮮や台湾の作品をこのような形でも翻訳・紹介し、中国人民に日本の帝国主義的な威嚇を示そうとした、その努力は評価に値するものといえる。

### 3、新京の『朝鮮短篇小説選』——反帝國的指向と視線の錯綜

1941年7月、満州国の新京で『朝鮮短篇小説選』が出た。日帝下朝鮮の作品が中国で翻訳・出版されたのは『山霊』に続き2度目のことである。だが、『山霊』は、朝鮮だけでなく台湾の作品も収録したものなので、厳格に言って朝鮮文学選集としては初めてのものといえる。「第9回・植民主義と文学フォーラム」に参加して発表した満州国文学の研究者・大久保明男によれば<sup>4</sup>、本書の編者・王赫は国民党左派の一員で、1942年に抗日の罪名で獄死した王覚と同一人物であるという。筆者も同じ考えである。当時、本書を編集した編者は、作品集『山霊』を知っていたものと思われる。もちろん、この『朝鮮短篇小説選』にはそのような話が出てこないが、本書刊行後に出た陳因の書評を見ると、『山霊』に対する認識がとても明確に出ている。

<sup>3</sup> 魯迅「論現在我們的文学運動」『魯迅全集・6巻』（人民文学出版社、2005）612頁。韓国語訳は『魯迅全集4』（ヨガン出版社、2004）による。

<sup>4</sup> 大久保明男「満州国の朝鮮文芸に関する考察—中国語新聞雑誌の一瞥」『日本帝国下／後の東北アジア文学』2013年11月。

現代の朝鮮民族は、その形勢において、私たちととても近接しているが、その意においては深い間隙がある。鴨緑江を境界として隣り合っただけでなく、満州には多くの朝鮮の農民が私たちと人生をともにしている。にもかかわらず、事実、意の疎通、感情の交流は、すべてきわめて貧弱であり、ときおりあるにすぎない。私たちに今必要なことは依然として意の疎通である。それを通じて協力を望むことができるからである。もし互いを理解できないならば、建設の効率も遅れざるを得ない。意の表現において一番ふさわしい道具は文学である。両民族の交流も文学の紹介と理解にあるだろう。朝鮮は私たちと近くにあるが、文学ではいかなる交流もなかったと言える。私たちは日本文学を知り、ひいては北ヨーロッパの文学まで知っているが、朝鮮文学に対しては茫然自失である。だからといって朝鮮に文学がないわけではない。また彼らの文学が国際的水準に達しないわけではない。たとえ水準に達しなかったとしても、両文学の疎通のためならば、知っておく必要があるのである。彼らの内部でも1つの水準があるだろうし、利を取るためにも、私たちはむしろ彼らについて、さらに多く知っておく必要がある。私たちは常に彼らに対する認識が足りず、彼らの現況や文学史についても知ることがなかった。過去に胡風が翻訳した『山霊』に掲載された4編の短篇を見たにすぎない。私はこの本の序文で張赫宙を知った<sup>5</sup>。

書評者のこのような言及を推察する時、編者である王赫もやはり『山霊』の出版をよく知っていたものとみられる。その作品集は台湾の作品も収録しており、朝鮮の作品はわずか4編しか収録されなかったため、中国の読者らの読書欲を満足させることがなかったのである。そのためあらためてこのような性格の書籍を出版しようとしたのである。

この作品集に収録されたものは、すでに満州国の雑誌や新聞に掲載されたものを選んだものである。現在、確認可能のものとしては、雑誌『明明』1937年12月号に掲載されたものが最も早い時期に翻訳・発表されたもので、最後が雑誌『華文大阪毎日』47号の1940年10月号に掲載されたものである。もちろん当時の雑誌『作風』1940年11月の訳文特集に掲載された作品も本書に収録されたという回顧があるが、実物は確認されていない。本書が出版されたのが1941年7月であることを勘案すれば、遅く考えても1940年末である。1937年から1940年までの時期に、満州国の雑誌や新聞に掲載された朝鮮文学の中国語に翻訳された作品を選んだのは明らかである。また各作品の翻訳者がすべて異なるという事実も重要である。『山霊』の場合、編者である胡風が作品をいちいち選定・翻訳して雑誌などに発表したものを集めていた。反面、本書の編者が、本書に収録されたすべての作品を選定・翻訳して集めたものではない。

このような特徴のために、本書の性格はきわめて複雑になっている。まず注目すべきは張赫宙作品の翻訳とその時期である。この作品集には張赫宙の作品「山犬」（山狗）と「李致三」の2編が掲載されていて目を引く。「山犬」は1934年と1935年に日本と朝鮮で日本

<sup>5</sup> 陳因「朝鮮文学略評」『盛京時報』1941年10月1日。

語と朝鮮語でそれぞれ発表され、後に満州国で発刊された雑誌『明明』に中国語に翻訳・掲載された。「李致三」は1938年2月に『帝国大学新聞』に日本語で発表され、中国語に翻訳された後、満州国の雑誌『黎明』に収録された。

『黎明』誌については具体的に知られていないので、正確な過程を把握することは難しい。明らかなのは、張赫宙が依然として中国内で朝鮮の最も進歩的な作家として知られていたということであり、また本書に掲載された彼の作品は、張赫宙が1939年以降、日本の国家主義に投降する以前の作品だという事実である。日本の左派文学者の後援の中で、張赫宙がプロレタリア国際主義を堅持しながら作品を書いていたころに出た作品である。すなわち、資本主義の延長として日本帝国主義に対する抵抗で一貫した作品が本書に掲載されているわけである。

だが、本書全体の状況はより一層複雑である。本書の大部分は、朝鮮ですでに朝鮮語で遠い昔に発表され、1939年以降の「朝鮮ブーム」の熱気で日本語に翻訳され、日本の雑誌に掲載されたものである。金東仁の「赤い山」、李孝石の「金」、李泰俊の「鴉」、李光洙の「嘉實」などである。この作品は中国語に再び翻訳されて雑誌に掲載され、このなかで編者が選んで本書に収録した。本書に収録された作品には、本書が出版される時点からさほど遠くないころに出たものもある。金史良の「月女」や兪鎮午の「福南」は、現在確認されたものとしては、1941年5月18日、日本で出版された『週刊朝日』の半島作家特集の一環で発表されたものである。この作品は中国語の雑誌に発表されず、直接この作品集に掲載された。

『山霊』は編者が直接作品を選んだのみならず、ほとんど同時期に発表された類似の指向の作品を選んで翻訳したもので、編者の編纂意識が明白に示されている。だが、『朝鮮短篇小説選』は、各作品を選んで翻訳した人たちが異なるので、共通の編纂意識を見出すことは容易ではない。もちろん編者である王赫が、すでに中国語で翻訳された作品を再び選んだわけで、そこに編纂意識がまったくないわけではない。実際にこの作品集には日本に協力する作品はまったくない。ここに収録された作家のうち、李光洙や張赫宙は本書が出るころには親日協力を始めていたが、彼らの作品は1939年以前のもので、そのような色彩がまったくない。当時、満州国で、国民党左派として活動した王赫であったから、日帝に協力する作品を選ばなかったという点で、自ら一貫した編者の意識があるとはいえるが、『山霊』のレベルには達していない。

このように混乱した様相は、当時、満州国の文壇でも問題になった。本書が出た後、陳因は書評を書いた。きわめて興味深い部分が多いが、本書の混乱した様相と関連して注目できるのは、金東仁の「赤い山」に対する論評である。編者である王赫は、日本語に翻訳された作品の中で、この作品が満州を扱っているために、大きな関心を持って選択したのである。この作品集の冒頭にこれを置いたのも、まさにそのような関心からであろう。だが、評者である陳因は、この作品の意味を正確に把握してその問題性を論じている。

収集した資料によれば、朝鮮の農民と現地の農民の間には衝突が頻繁にあった。従来いわゆる二重国籍の保護下で事実を書くことができる作家はいないだろう。私たちは作家に同情する。彼が怨恨を抱いたのは当然のことである。圧迫によって放浪の運命を免れず、安定した生活をするのはできないのである。だが、彼はより一層正確な世界観を持つことができない。ただ雑駁で狭隘な民族的な枠のなかで遊んでいるのである。だからこの作家は失敗したといえる<sup>6</sup>。

金東仁の「赤い山」は、偏狭な民族主義に立った作品であるから、当時、東北地域の実状をきちんと扱えなかったというのは、韓国の学界内でもすでに議論されたことがある<sup>7</sup>。日本帝国の支配下で、朝鮮人と中国人が経験した衝突の実状を直視できず、中国人の抑圧に対する朝鮮人の苦痛を、一方的かつ部分的に扱うことによって、その実状を見逃してしまったのだが、評者の陳因はこの点についてきわめて正確に語っている。「狭隘な民族的な枠」とはまさにこのことをめぐって語ったものである。編者である王赫は、満州の朝鮮人問題を扱っているという点に注目して選んだが、評者である陳因はそれがさほどいい選択ではないと語っているのである。このような混乱した様相であるにもかかわらず、この選集は、朝鮮の多様な作品を掲載し、朝鮮文学の幅と深さを示そうとした点で、プロレタリア国際主義の視線のみが存在する『山霊』を越えたものであるといえる。

#### 4、帝国の言語、反帝国の言語

『山霊』や『朝鮮短篇小説選』は、出版された地域と編纂過程の違いにもかかわらず、共通的なのは、中国が日本帝国の植民地に転落しているという事実に対する歴史的覚醒から始まっているという点である。

魯迅や胡風が『山霊』を翻訳・出版する頃は、日本帝国が東北地域を越えて華北地域を侵略しようと、さまざまな事件を画策していた時期である。魯迅や胡風も、プロレタリア国際主義の立場を修正し、植民地の民族問題を考慮し始める時である。1932年に自らが暮らしていた上海地域で上海事変が起きた時に、魯迅が首肯しなかったのは、まさにプロレタリア国際主義に立ち、国民党と日本資本主義を同一視した見解であった。だが、日本帝国が華北地域を本格的に侵略しようとしていることを感知し、無産階級革命文学のスローガン捨て、民族革命戦争の大衆文学を掲げた。このことがまさに『山霊』を翻訳・出版した歴史的背景であるといえる。

日本帝国は1937年、「治外法権の撤廃」を通じて、満州国が独立国家であるという事実を対外的に宣伝しようとしたが、多くの中国人が、満州国は日本帝国の植民地であるという事実を直視し、これに対して抵抗した。これがまさに『朝鮮短篇小説選』が翻訳・出版

<sup>6</sup> 陳因「朝鮮文学略評」『盛京時報』1941年10月8日。

<sup>7</sup> 李相瓊「1931年の排華事件と民族主義言説」『満州研究11集』2011年6月。

された歴史的背景であった。『朝鮮短篇小説選』に収録された作品の中で、中国語に初めて翻訳され雑誌に掲載された張赫宙の「山犬」(山狗)が中国で出たのが1937年であるという点は、単に偶然とはいえない。日本帝国が満州国を建設した後、独立国であることを偽装するために行ったことのうち、最も核心といえる治外法権撤廃が公布された年に、中国の文学者は、自らが日本帝国の植民地であるという事実を強調するために、同じ植民地の苦痛を味わっている朝鮮の作品に目を向けたのである。

だが、中国の知識人は、朝鮮語を理解しなかったために、結局、日本語に翻訳された朝鮮文学の作品中から選んで重訳を試みた。植民地朝鮮を理解すべきであるという意欲が、言語の問題を越えたのである。彼らが重訳の不完全さ理解しなかったはずはないだろう。より一層重要なのは、朝鮮の文学を通じて、朝鮮人と彼らの境遇を理解すべきだという切迫感であった。このことを通じて、窮極的に日本帝国の威嚇の下に置かれていた自らの未来を案じ、生を省察しようとしたのである。帝国の言語である日本語を反帝国の言語として専有した知恵であったといえる。